

奨励研究 研究報告書

研究課題

東京における近代数寄者の作庭活動と庭師

—高橋箒庵と庭師・松本亀吉を中心に—

福岡県教育委員会文化財保護課

正田 実知彦

(選考時所属 東京農業大学大学院農学研究所造園学専攻)

はじめに

関西地方、特に京都における近代数寄者の作庭活動に関しては、七代目小川治兵衛（植治）に関する研究を中心に、その特徴や経緯が明らかにされている。しかし、東京の近代数寄者が造営した庭園の多くは、震災や空襲、所有者の変遷等により失われ、その作庭活動の特徴やそれを担った庭師の研究がなされていないのが現状である。また近年、近代建築史の分野では、近代数寄者の営んだ邸宅の研究が進められ、敷地の変遷や特徴が明らかになるなど、庭園と一体となった近代数寄者の邸宅に関する評価が待たれている。

そこで本研究では、茶会記や日記など多くの記録を残し、また自ら多くの茶室や茶庭を造営した近代数寄者・高橋箒庵の作庭活動と、その活動を支えた庭師・松本亀吉との関係を明らかにする。

## 一 高橋箒庵と庭園

### (一) 高橋箒庵について

高橋箒庵（一八六一・一九三七）が茶の湯と出会ったのは明治二十五年（一八九二）のことである。益田克徳（一八五二・一九〇三）に根岸の自宅に招かれ、克徳流の気取らない茶の湯に触れたことから、その魅力に取り憑かれていった。その後、明治二十六年（一八九三）から三井銀行大阪支店長となった箒庵は、当地においてしばしば茶会を経験し、明治二十八年（一八九五）東京に戻り本格的に茶の湯に没頭することとなる。明治三十一年（一八七〇）に麴町一番町に邸宅を営んだ際は、杉孫七郎（一八三五・一九二〇）の斡旋により茶室・寸松庵を邸内に移築し、茶庭の設計を克徳に依頼した。明治四十四年（一九一一）に実業界を引退し、自由の身となった箒庵は、四谷伝馬町の白紙庵（大正三年）や赤坂一ツ木町の伽藍洞一木庵（大正六年）の庭園を自ら設計した。この時すでに益田克徳は亡くなっている。その後の箒庵は、自分の庭園だけでなく、友人知人より依頼され多くの庭園築造に関わるが、その際、好伴侶としたのが植木屋・松本亀吉（一八七七・一九二五）であった。

### (二) 高橋箒庵の庭園観

高橋箒庵は、築庭について「世に様々の娯楽あるが中に、庭を造る程面白いものはありすまい」（『我楽多籠』）と述べている。数多くある趣味の中でも築庭を好んだ箒庵は、石材をはじめとする庭園材料と庭園からの眺望に非常にこだわった。築庭上の彼のこだわりについては、その著書『我楽多籠』や『趣味ぶくろ』に詳しい。

## 二 松本亀吉の活躍と高橋箒庵

### (一) 松本亀吉の経歴

松本亀吉は、初代松本幾次郎の三男として、明治十年（一八七七）江戸下根岸に生まれた。父・初代幾次郎は、慶応二年（一八六六）に上野東叡山寛永寺の老松を救い、輪王寺宮より永代出入りを命じられた庭師であった。兄は、渋沢栄一（一八四〇・一九三一）の暖依村荘庭園や成田山公園の築庭に関わった二代松本幾次郎である。亀吉は、大正元年（一九一二）に兄のもとを離れ独立し、築庭に従事したが、大正十四年（一九二五）五十歳で他界した。

### (二) 二代松本幾次郎の存在

松本亀吉は家業である庭師の道を歩み、高橋箒庵の知己を得ることとなるが、その中で二代幾次郎の存在は欠かせなかった。兄である二代幾次郎は、明治十七年（一八八四）父より家督を継ぐ。その時、亀吉はまだ七歳であったから、庭師のイロハは兄から学んだと考えてよいだろう。二代幾次郎は、明治三十六年（一九〇三）の読売新聞で「諸藝一流今の名人・庭作りの名人松本幾次郎」と特集されるほど有名な庭師であった。二代幾次郎は、渋沢栄一郎、阪谷芳郎邸、山本唯三郎邸、益田克徳邸など多くの政財界人の庭を手がけている。その中でも渋沢栄一とのつながりは深く、栄一が二代幾次郎の技術を愛し、重用していたことが分かっている。

### (三) 益田克徳と松本亀吉

高橋箒庵の著書『我楽多籠』には「私の使つて居る植木屋は松本亀吉と申して、元と益田克徳氏が使つた男であります」とあり、箒庵と亀吉は益田克徳を介して知り合つたと考えられる。おそらく麹町一番町邸を築造した時だろう。植木屋松本家が政財界における大物の庭園築造を担うきっかけとなつたのは何だつたのだろうか。

松本らが関与した庭園で最も古い記録が残るのは渋沢栄一の暖依村荘庭園（東京都北区）である。暖依村荘は、明治十一年（一八七八）渋沢がコレラの感染を恐れた妻のため、東京市街を離れた飛鳥山の隣地に築いた別荘である。明治十二年（一八七九）その別荘に米國大統領であつたグラントが来訪することとなり、その整備のため松本のもとから多くの職人がやってきた記録が残っている。渋沢と克徳は複数の会社を共同設立するなど、実業界で深いつながりがあつた。そのため、克徳が明治十四年（一八八一）に撫松庵を築庭する際、渋沢より松本の紹介を受けた可能性が考えられる。

### (四) 高橋箒庵と松本亀吉

高橋箒庵と松本亀吉の関係については『我楽多籠』に端的に記されているので以下に引用する。「私は庭が好きで、諸方の庭を見物致しましたが、兎角門外漢では其趣味を解する事が出来ませんから、自身で庭を造り又友人等より頼まれて築庭の指圖をしましたが、素人の事とて固より一人で庭を造る事は出来ません、大體設計を立つれば、其後は熟練なる植木屋に命じて理想の庭園を造らせますので、私の使つて居る植木屋は松本亀吉と申して、元と益田克徳氏が使つた男であります、私は此男を手に附けてから、鹽原へも遣り、京都へも遣はし、諸所の庭園を研究せしめて永年使用して居りますから、略ぼ私の氣風を呑込んで、大體の指圖をすれば其後は颯々と進行して不調法なく、最近濱町常磐屋の庭を造つた時などは、固より小庭ではありますが、前後四回參つて指圖をした丈で出来上つた位であります。」

このことから、高橋箒庵は築庭の際、計画・設計を担当し、その意圖を理解した亀吉が実際に具体化していったことが分かる。また、箒庵が亀吉を京都や塩原に連れて行き庭園に関する研究を積ませ、自分の理想を確実に形にできるよう養成していたことが窺える。なお、これとほぼ同じ文章が『趣味ぶくろ』にも掲載されており、そこには小見出しで「先づ庭師の養成から」とある。自分の理想を理解し、具体化できる優秀な庭師の存在を箒庵が重要視していたことが分かる。箒庵は亀吉だけでなく、他の庭師の育成にも取り組んでいる。大正二年（一九一三）三月二十日（『萬象録』）には、山本栄男（後妻揚子の姉婿）の兄の紹介を受けた草刈氏が茶庭専門の庭師になることを希望して箒庵と面会している。残念ながら草刈氏は人物として不適當であつたようだが、箒庵はその後、築庭家を夢見る外山英策の養成に手を貸している。

高橋箒庵が明治四十五年（一九一〇）五月から大正九年（一九二〇）まで記した日記『萬象録』には、松本亀吉の名前が八十一回登場する（表一）。その内容は庭園築造に関する指圖や庭園材料（主に筑波石）の斡旋が多くを占める。また、『萬象録』には京都の小川治兵衛（植治）も三十五回登場する。資産が百万円を超えることから「古今無類の植木屋」と紹介し、どこか禅味があり面白い人物であると評価している。

### (五) 築庭家と庭師

高橋箒庵は、松本亀吉や小川治兵衛を庭師もしくは橐駝師、植木屋などと呼び、築庭家（造庭家）とは区別している。箒庵は『趣味ぶくろ』の中で「近代の優れた造庭家」として、益田克徳の名を挙げているが、それとともに「近代造庭の宗匠と云はれるものは、殆んど皆無で、先年岩崎男爵家の庭を作つたのは、大阪の磯谷某と云ふ宗匠、三井男爵家の庭を作つたのが、京都の敷内の宗匠とか聞いて居るが、何れも格別の手腕とも思はれない。」と述べ、築庭家の不在を嘆いている。また、大正五年（一九一六）に箒庵が植治と共に南禅寺界限の別荘地を訪れた際も「南禅寺付近は資産家の別荘地と爲り、幾多の庭園相隣接するに至りたれば自から京都の一名所と爲りたれども、唯築庭家其人を得ず、あたらし景勝の地を俗了する者多きは惜しむ可き事なり。」と、ここでも築庭家の不在を嘆き、植治ら庭師と築庭家を区別していることが分かる。

箒庵と亀吉の関係から、築庭家は全体の構成を考える設計者（庭の専門家というよりも茶の湯の

宗匠や数寄者のこと)、庭師は材料を調達し施工を担当する庭の専門家を指していると考えられる。高橋箒庵が、庭師養成の重要性をその著書の中で述べたように、近代数寄者は、優秀な庭師を抱えることをある種のステータスとしていたと思われる。

#### (六) 外山英策の養成

駒場農学校(現・東京大学農学部)を卒業した外山英策が『萬象録』に初めて現れるのは、大正五年(一九一六)九月二十九日のことである。箒庵は、外山のことを三井慈善病院長であった木村徳衛から紹介された。後日、箒庵に面会した外山はその経緯を以下のように説明している。「自分は少年の頃或る書を読んで園丁と爲るが一番長命すべしと云ふを見て園藝は最も樂み深き者なるを知り、今度農學校を卒業したるに就き築庭家と爲りたしと思ひ立ち駒場大學の原教授に相談したるに、目下就て築園の事を學ぶ人なかるべしとの事なりしが、木村先生の紹介にて今日貴殿を訪ひたる次第なり」ここに登場する原教授とは、日本の園芸学を確立し、また神宮内苑など多くの庭園設計も手掛けた原熙(一八六八・一九三四)のことである。その原熙が参考にすべき築庭家はいないと云っているのは注目される。

築庭家の不在を嘆き、育成の必要性を感じていた箒庵は、外山を亀吉の元で修行させることにする。当初は半年の予定だったが、大正六年(一九一七)五月には箒庵と共に京都へ赴き、また大正七年(一九一八)五月からは渋谷の津村重舎邸築庭で外山が初めて設計を担当している。大正九年(一九二〇)に本庭園を見た箒庵は、「大體に於て上出來の庭園と爲りたり」と評価している。

その後の箒庵と外山の関係は分からないが、外山は昭和九年(一九三四)に大著『室町時代庭園史』を記すなど、文献造園史学の分野で名を残した。高橋箒庵や松本亀吉のもとの修行がその後の外山に大きな影響を与えたことは想像に難くない。

#### おわりに

今回は、高橋箒庵の著書等から、庭師松本亀吉と高橋箒庵との関係を中心に明らかにした。その中でも、箒庵が築庭家と庭師を別の職能として捉えていたこと、また箒庵が庭師の養成を重要視していたことは注目される。しかし、箒庵や亀吉の築庭上における特徴を実際の庭園や残された記録から明らかにすることはできなかった。今後は、亀吉と箒庵が共に作庭した庭園と箒庵が関与しなかった庭園を比較検討し、個々の人物の特徴を明らかにしていくこと、また、他の数寄者と庭師の関係についても研究を進める必要がある。

今回の調査研究を進めるにあたり、東京農業大学助教栗野隆氏をはじめ、須長一繁氏、松本恵樹氏にご助言を頂きました。厚く御礼申し上げます。

#### 主要参考文献

- 『萬象録 卷一・卷八』高橋義雄著 思文閣出版 1986-1991年
- 『東都茶会記 一・五』高橋義雄著 淡交社 1989年
- 『我楽多籠』高橋義雄著 箒文社 1914年
- 『箒のあと上下』高橋義雄著 秋豊園 1933年
- 『趣味ぶくろ』高橋義雄著 秋豊園出版部 1938年
- 『名園五十種』近藤正一著 博文館 1910年
- 『近代数寄者の茶の湯』熊倉功夫著 河原書店 1997年
- 『近代数寄者太平記』原田伴彦著 淡交社 1976年
- 『益田克徳翁伝』大塚栄三著 東方出版 2004年
- 『近代数寄者のネットワーク』齋藤康彦著 思文閣出版 2012年

表1 松本亀吉の『萬象録』記載一覧

No.	巻数	ページ	年	月	日	概要
1	1	68	1912(T1)	8	29	裏野師松本亀吉宅、今度筑波山の麓に於て生駒石に似たる陸石を發現して之れを買収したる由、従来東京にては近所に良石なきが爲め、園に雅緻なき石を用ゆる者多く、小石川後園、松浦家の蓬菜園等皆然らざるなし。(中略) されば今後東京にて名石を得んとするに専ら京都に仰がざる可からざれども、京都も石拂鹿にて其價非常に騰貴したれば、近年稍損三島邊より陸石を運搬する者多きに至りたれども、奈良、京都の石の如く其石質の良好ならざるは又是非もなき次第なり、然るに今東京より精選せらるる筑波山下にて良好なる陸石を得らるる事も亦ならず、今後東京の築園上に非常の便利と爲らるべし、余は遂て同地に出張して其石質等を検査すべしと松本に約せり。
2	1	242	1913(T2)	2	17	午前四谷普請場へ赴き十五日以來積上中の新築を檢分し、又松本亀吉を招きて右玄關前にある松林移樹の位置を指圖せり。
3	1	260	1913(T2)	3	10	午後四谷普請場に至り、裏野師松本亀吉及び八田園圖等を集めて、茶室持合の位置を相談し且つ庭園の趣向に就き協議を凝らせり。
4	1	261	1913(T2)	3	12	四谷新宅の庭園築造に赴きせんとするに就き、樹木移樹の時期に依れざるやう松本亀吉を京都に遣はし、豊杉数十本を取寄する事と爲せり。
5	1	276	1913(T2)	3	30	午後妻と共に四谷普請場に到り、松本亀吉が田畑より持ち来りたる楓の大樹を妻の居間の前に移樹する位置の檢分を爲せり。
6	1	279	1913(T2)	4	1	午前六時登汽車にて松本亀吉及び子三雄を同押して先づ下船に赴き、同所より人力車にて四里弱分たりに筑波山麓に當る松林中に散在する山石を檢分せり。此石は其實質堅硬にして硬味を帯び打水の乾かざる所など殆んど生駒石に類似せり、而して其賦色は緑りに堅緻にして遊ぎて人工を施す事難まざるに在り。…(以下、略)
7	1	286	1913(T2)	4	10	豊杉買入の爲め京都へ出張中の松本亀吉歸京、豊杉二百五十本、白河砂利五十餘を買入れたる由、豊杉は京都にては北野附近に於て所有する者多かりしが次第に其數を減じ、今は或る集積所が廻り數十本を所持して備前に高價を主張し居る由、亀吉は其草創の爲め筑波街道より十本を買入れ、次に右裏野師より十五本を百七十圓にて買入れたる由、此二十五本は一車に積込みて東京へ運送する見込みなりとの事、今後築園に於て豊杉を僅に植えんとする者あつても此有様にては最早多數には得らるべし。
8	1	294	1913(T2)	4	27	午前高橋毛利邸の門前に新築したる田中屋の別宅に、女主人の賓臨炭にて静養中なるを訪ふ。藤山雷木先づ在り自動車を以て迎はれたるに就き、途中室田藤又氏を訪ふて同邸を訪ふて同邸を誘ひ右別宅に赴く、別宅は南に毛利家の大樹木を仰ぎ細長き池に圍して新築の眺め最も佳なり、且つ松本亀吉の手を以て庭園築造中なるが紅葉の時は定めて美観なるべし、盛夏期に入り蚊の多きが煩なるべきか。
9	1	300	1913(T2)	5	5	午前四谷普請場へ赴きて松本亀吉が筑波山下沼田より運送したる陸石を檢分す。
10	1	331	1913(T2)	7	5	松本亀吉四谷の園園に移植すべき椎の大木を買収したる由、近來東京市中に園園を築く者多く樹木の相場大に暴騰せしのみか、松の如きは代價に拘らず殆んど佳木を得る能はず、椎にても今度買入れたるは貳百圓乃至三百五十圓など云ふ者なり。
11	1	424	1913(T2)	11	17	午前濱町常盤屋主人の依頼に應じて同家に赴き、今度新宅の敷地に附属する園園を一覽せり。前に土壌更にて面積廣からざれば、在來の樹の木を補足して其一隅に或る神社の傍より池を取り、成る可く障籠に築造するに決し、松本亀吉に申付たり、今度常盤屋の改築は在來の家庭の上四十疊ばかりの二室を増強し、更に浴槽の一室を作りて休憩所に充て、在來の奥に木造を破壊し蓋したるにて、一部の好事家中には必ず苦惱あるべしと雖も、難多の來客を相手とする料理屋として時勢に應ずるの進歩的考案なるべし。
12	1	435	1913(T2)	12	3	松本亀吉も同時に來りたれば古丈と植木屋に對して、近來樹木の心博方甚く舊價に依り出動も速く査査前後に煙草片をなし、短日に於ては殆ど三四時間位働きて一日を過ごす有様なり、斯くの如き習慣は今日此進歩の世界に逆ずり。…(以下、略)
13	2	91	1914(T3)	4	28	中島作次郎來宅、永田町新宅園築決定に就き不日種張りを爲し、翁々築園に取り掛りたしとの事、故て筑波山より陸石取寄せ方を松本亀吉に命ぜり。
14	2	121	1914(T3)	6	3	午前、中村作次郎より使者にて陸石の買入方を依頼し來る。松本亀吉に命じて筑波下の大石運送に着手せしむ。
15	2	210	1914(T3)	9	15	松本亀吉筑波山より運送したる大石を居間の前に運付く。
16	2	228	1914(T3)	10	5	中村作次郎宅に赴き築園の指圖を爲す。大體の設計案既に決定したるに就き陸園を認めて松本亀吉に渡せり、既に常盤南西の一隅を塚科として奥築き處より築き落し、巖の傍側に園持合兼茶の土室を造り、これを龍見茶室と爲し、又時に茶室中立の所とも高き趣向なり。…(以下、中略)
17	3	174	1915(T4)	5	12	概上廣野氏宅、同氏の親里は秋田縣角田川町なり、今度同所に邸宅を築築せんとする園園に就き余の意見を發したき由なれば、二、三注意の點を述べ置きたり、氏は昔語を好み昔杉の柱を以て壁間に架置し意樂したるに、秋田縣は地盤が多き處にて或る時の震動に大破壊を來し、柱の前置も最も薄弱なるを知り、前後決して柱柱を用ひずと決心せりと物語れり、右邸園築造に就き、松本亀吉に一度實地檢分の爲め出張を依頼したるよし、遂て同人に申附くべしと答へ置きたり。
18	3	189	1915(T4)	5	19	高山長車氏宅、同氏陸園用の陸石を買収めたき由に就き、凡そ二千圓を程度として筑波山下の山石運送の事を松本亀吉に申付け、序を以て今度余が向島藤川園内に築造すべき茶室の陸石も取寄する旨なり。
19	3	192	1915(T4)	5	21	中野友次郎氏は夫人を失ひたるまま高橋南町可性西洋館を他人に貸し、子供五人を養育方に預けて獨居の境涯となりたるに就き、其住居に適する二十坪位の住宅を築造せしむるに就き、其位置及構造に就き意見を聞きたるにて本日午前自動車を以て出立れり。折柄植木業松本亀吉宅中なれば之れを伴ひて實地を檢分せり。…(以下、略)
20	3	217	1915(T4)	6	5	松本亀吉豫て同人に依頼し置きたる廣川邸内茶室築造場所の見取圖を持参す。尚ほ本日古丈より運送したる陸石、菖包を解きて適宜の場所に取附附方を命ず。
21	3	304	1915(T4)	8	16	午前、松本亀吉、高山長車氏の湯谷邸築造指圖を持参す、不日實地檢分の上指圖すべしと約せり。
22	3	305	1915(T4)	8	17	午前、向島藤川園に赴き松本亀吉、木村清兵衛立會の上、構築指圖を爲す。陸園守衛掃除の爲め余匠の家族を住居せしむる必要を認め、陸園近地に輪古所四疊半、家族室八疊、玄關土室附の一構を設くる事に決し、園川親々拱手環柱、福原修雨氏に相談せしに、建築すべき者なし、僅五十本、松大小四五本一覽の上買取りては如何となり、来る二十日住期を約す。跡述、松本亀吉方に立寄り、中村敬右衛門新宅中庭に置く石燈籠、神燈石を檢分し、燈籠一基四十圓、高口形神燈石一個二十五圓なるを現して、中村の承諾を得て買取る旨なり。
23	3	307	1915(T4)	8	18	高山長車氏の湯谷新宅に赴き松本亀吉、古木古太郎立會の上、新築の各室見取り図を指圖す所あり、又陸園築造設計に就き大體の指圖を定め、先づ其經費見取りを松本より提出せしむる旨なり。
24	3	312	1915(T4)	8	22	松本亀吉、高山氏宅庭園築造指圖を持参す。今日まで送り置きたる筑波山出捨石千數個、其他石燈籠、神燈石等千四百圓計りなるが、今後猶ほ四百圓を要すべき見込みなり。
25	3	339	1915(T4)	9	15	午前松本亀吉同押、向島藤川園に赴き構築指圖を檢分せり。
26	3	340	1915(T4)	9	16	午前、湯森庵新築の序に就き大工木村清兵衛、松本亀吉同道來宅、至急地均らしを爲し來年三月前に悉皆成就するよやう着手の事を命ぜり。
27	3	346	1915(T4)	9	19	午前、代々木の中村敬右衛門宅を訪ひ、松本亀吉を同押して中庭築造の指圖を爲す。更に高山長車氏の新宅を見取り、床の間水屋等を指圖し、又陸園に就き格石、洗手鉢等の配置を定む。
28	3	353	1915(T4)	9	28	午前、中村敬右衛門の代々木新宅に赴き中庭築造の指圖を爲す。午後、向島藤川園に赴き構築指圖を爲す。松本亀吉に命じて明日より地均しに着手せしむ。
29	3	373	1915(T4)	10	11	湯森庵新築場所を檢分し、洪水の用心に陸園築地地十分高くし置くの必要を感じたれば、來會の大工木村清兵衛、園師松本亀吉にそれぞれ土盛りを指圖せり。
30	3	388	1915(T4)	10	30	午前、中村敬右衛門宅に赴き倉室北側の中庭に養平竹、櫻竹を植ふ。松本亀吉より持参の石燈籠を置き合せて前園に白川砂利を敷き懸せり。又同家杉戸の園築に就き敬右衛門と相談せり。
31	3	400	1915(T4)	11	1	湯森庵田平太郎邸の今井町宅に立寄り、松本亀吉を伴ふて新に茶室を建設すべき場所を實地調査せしに、適日來木村清兵衛に命じて設計せしめたる園築にては勝手甚き所あり、更に新築案を製すべきに決せり、主人男爵は風邪にて引續中會せず。
32	3	451	1915(T4)	12	14	過日青山原常棗木屋の前を通過せし時、一風飄りたる大形石燈籠あるを、持主某植木屋と談判の後二百圓にて買取る事に決したれば、本日松本亀吉に金子を渡して明日向島湯森庵園内に引移せしむる旨なり。
33	4	19	1916(T5)	1	18	植木屋松本亀吉、麻布四の橋の田島築宅の陸石樹木を實地檢分せしに、石額は取るべき者なし、僅五十本、松大小四五本一覽の上買取りては如何となり、来る二十日住期を約す。
34	4	23	1916(T5)	1	20	午前、松本亀吉を伴ひ麻布四の橋田島氏宅に赴き陸園の實物を一覽す。植木五十本代價二百圓なりと云ふ、外に松の樹數本あり、内二本は下枝少けれども園築閉中に赤旗筋の園に移し得くれば極めて佳好なるべしと思ひぬ。右樹木運送等の取柄を爲したる上買取相談を爲すべき旨。
35	4	50	1916(T5)	2	12	植木屋松本亀吉宅、筑波山麓より陸石取寄せに就き相談あり、右陸石は一旦黒旗の停車場に下し、同停車場附近なる岩崎家所有地を百坪程借り受けて假置場に充て、所有に應じて諸方に分配するが便利ならんと云ふ、因て右方法に依り成る可く至急筑波より運送方を命ぜり。
36	4	55	1916(T5)	2	16	午後、妻と共に湯谷の高山長車氏を訪ふ。主人は聖堂出張中不在、夫人應接、松本亀吉も來會して新宅築造の指圖を爲す。來來煩雜なき趣向にて玄關前の勾配餘り危なれば、隣地を四、五間買取て其勾配を緩くすべしと夫人に注意し置けり。
37	4	61	1916(T5)	2	21	午前九時、松本亀吉を伴ひ代々木の中村敬右衛門宅に赴き築園の指圖を爲す。折柄來會したる植木屋中村信太郎が、程遠からぬ某氏の宅に松の木二本賣物あれば一覽を企ふとの事に就き、松本と共に之を賣檢せしに、如何様相當の木振なれば直に買物を結ばしめ。
38	4	81	1916(T5)	3	8	木下川附近にて茶川の朝川殿となつた村落中に樹木を賣却せんとする者あり、椎の樹七、八本目覺ましき者あれば一覽せよとて松本亀吉の案内するに任せ、午後實地檢分に出掛けたるに、向島湯森庵及び赤坂新宅前に使用すべき者あれば大半建築(定)くる事と爲せり。跡述、向島湯森庵に立寄り右の樹木附屬所を指圖し、且つ先刻植木屋に電話し置きたる賣却御覽着色紙一紙を借せり。
39	4	94	1916(T5)	3	20	陸園植木屋松本亀吉と申會せ、黒旗停車場附近岩崎家所有地百餘坪借り受けて筑波山より搬出せし陸石の賣場と爲し、今後知人の所望に應じて夫れ分配する筈にて、既に到着せし者十五圓に達せし由なれば本日松本を伴ひ實地檢分せしに、黒旗停車場の附近にて遊歩道便利なり、且つ立木あるが爲め吉色保存上極めて好都合なるやうなり、更に向島湯森庵に赴き、大工木村清兵衛立會にて中庭の設計相談を爲す、植木門を改めて中庭門を置く事と爲せり。
40	4	117	1916(T5)	4	8	午前、松本亀吉同道中村敬右衛門方に赴きて石燈籠、洗手鉢、大捨石等の配置を指圖す。(中略) 午後二時、崩元梅吉を伴ひ向島大倉別荘に赴く、途中湯森庵に立寄り今度妻より到着の石燈籠を檢分し、松本亀吉に陸園木石配置を指圖す。

『室町時代庭園史』 外山英策著 思文閣 1934年  
『造園修景大事典』 造園修景大事典編集委員会 同朋社 1985年  
「渋沢栄一の造営した暖依村莊庭園の特徴と近代庭園史上における位置づけ」 正田実知彦 東京農業大学修士論文 2012年  
「旧渋沢庭園と三人の作庭者」 正田実知彦 あらかわ学会 2011年  
「近代の東京を代表する庭師・二代松本幾次郎の経歴」 松本恵樹・正田実知彦 日本造園学会 2011年  
東支部大会 2011年  
「2代松本幾次郎・亀吉と旧齋藤家別邸庭園」 松本恵樹・正田実知彦 旧齋藤家別邸庭園調査報告書 2012年

41	4	137	1916(T5)	4	26	午後、向島婦森庵に赴き梅見門の位置其他築園上の指圖を爲す。向島は上汐の際河風に汐氣を含む爲にや、奈良より回送の礎石、杉若精色を帯び移状目も當てられず、今度始めて庭園に不適當の地たるを知れり。先般松本龜吉の手を以て木川方面より移したる椎の木五六本も亦平植の如く言葉大方形敷り果てたるが是れも潮風の爲めならん、但し根れ果てたるに非ざれば速て新芽を發するなるべし。
42	4	150	1916(T5)	5	5	午後一時、向島婦森庵に赴き松本龜吉、木村清兵衛立會にて、龍地垣根梅見門御書等の位置を決定し主要の礎石を配置せしむ。
43	4	155	1916(T5)	5	9	松本龜吉土木建築師多田厚雄を連れ來り、赤坂一ツ木宅地の隙屋石垣設計圖案を提出す。因て右兩人を現場に伴ひ龍地垣石垣全部を根底より取崩し、現在高さ二間の石垣を四間乃至四間半に築直して、崖地に間五間横十六間の平地を作る事と爲し、新に其設計を命ぜり。
44	4	157	1916(T5)	5	11	入札品一覽後向島婦森庵に赴き礎石、燈籠、飛石の配置を指圖せり。當日は松本龜吉以下八名の職人を監視して八分通り飛石を接配せり。
45	4	192	1916(T5)	6	3	午前、松本龜吉を伴ひ、巢鴨の停車場に赴きて筑波山下より回送し來りたる礎石を檢分し、赤坂新宅及び向島婦森庵に用入の分を選定す。
46	4	274	1916(T5)	6	19	藤田平太郎來宅、相携へて巢鴨停車場石置場に赴き筑波より回送の礎石を檢分す。此礎石は最初赤坂新宅に差運すべしなりしが、筑波石は其品格何となく奈良石に及ばざれば、赤坂新宅には成る可く奈良石を捜ひたしと思ひ、今度藤田男の所望に應じ、男が先般山縣公より買取られたる椿山莊に差運す事と爲したるなり。松本龜吉に心算の代價を計算せしめ盡さざり、最高九十圓より最低五圓までにて、藤田男は十數圓を買取るべく約束す。
47	4	218	1916(T5)	6	20	午前十時、向島婦森庵に赴き、龍地及び穴室の工事上より付松本龜吉及び木村清兵衛に指圖し、本日に於て婦森庵建築工事大畧竣成せり。尚ほ間内道敷築造等は多田厚雄に命ぜり。
48	4	250	1916(T5)	7	14	榎木屋松本龜吉と巢鴨停車場石置場に相會し、今度筑波山下より新に回送されたる礎石を檢分し、先般小田原古橋庵にて山縣公に獻上せんと約せし礎石二個を選定し、其外三個は赤坂新宅に回送の旨。
49	4	251	1916(T5)	7	15	松本龜吉を招き小田原古橋庵に回送の石を新に筑波より取寄する事とし、至急筑波に出張を命ぜり、昨日巢鴨停車場にて一覽したる礎石は餘り大き過ぎて運送上甚だ不便なればなり。
50	4	254	1916(T5)	7	17	向島婦森庵建築費用悉皆を大工木村清兵衛、榎木屋松本龜吉に支拂ふ。建築費約五千二百圓、築園費約九百圓、外に疊、建丸、礎石、踏石、燈籠等を合算すれば大約一萬圓に達すべし。
51	4	268	1916(T5)	8	1	松本龜吉を招き小田原古橋庵に寄置の礎石を筑波より回送し來りたるや如何と尋ねたるに、道中積荷詰り迂路を取りしが爲め大に遅延せしむなり。
52	4	283	1916(T5)	8	14	午前、松本龜吉を伴ひ巢鴨停車場に赴きて筑波山加波兩山より回送の礎石を檢分し、其中三個を選定して小田原古橋庵に回送せしむ。
53	4	285	1916(T5)	8	18	山縣公に進呈の礎石三個、巢鴨停車場より小田原古橋庵に向付て發送の旨松本より報告ありたり。
54	4	298	1916(T5)	8	27	松本龜吉來宅、筑波より回送の礎石十數個更に赤坂新宅地に回送せし旨報告あり。
55	4	291	1916(T5)	9	29	三井慈善病院長醫學博士木村徳衛氏來宅、同郷人にて今年農科大學を卒業せる外山英策なる者、築園家と爲りたき志願なりとて相談に來りたれば、半ばを著て職人に爲り得るの決心ありやと問ひたるに、勿論其決心ありとの事に就き、さらば相談すべき人ありと申して一旦歸宅せしめけるが、實は責下の意見を問かんと思ひて離り出でたる次第なりと云ふ。因て余は若し其人大に熱心にして且つ築園上の天才を有するに於ては方に時代の要求に應ずる者にして後來必ず成功すべし、幸ひ余は今より赤坂新宅に庭園を作るべき旨なれば、取り敢へず松本龜吉の弟子として實地研究を爲し、果して其任に堪ふるや否やを試験したる上にて更に余の意見を述べしと答へ置きぬ。
56	4	298	1916(T5)	11	24	午後、松本龜吉、外山英策を伴ひ駒澤村所有地に赴きて、當春租掘したる松の木五本を赤坂新宅地に移植の手配を指圖す。
57	4	341	1916(T5)	10	3	醫學博士木村徳衛氏より紹介の駒澤農科大學卒業農學士外山英策來宅、自分は少年の頃或る書生讀んで圖つて爲るが一番長命すべしと云ふを見て園藝は最も樂み深き事なるを知り、今度農學科を卒業したるに就き築園家と爲りたしと思ひ立ち駒澤農科大學の原教授に相談したるに、目下就て築園の事を學ぶ人なかるべしとの事なりしが、木村先生の紹介にて今日貴園を訪ひたる次第なりと云ふ。彼て余は今日學問を修めたる立派なる築園家なれば所謂時代の要求に應ずる者にて必ず成功すべしと雖も、築園術は天才的のものにして誰でも之れに通ず可きならず、目下自分は赤坂新宅に庭園を造らんとする折柄にて、今より來年四月末頃まで凡そ半年を要すべければ、既に此庭園の榎木屋松本龜吉と共に半年間築園の實地を試み、然る後に去就を決するが捷徑ならん、赤坂新宅着手次第即ち即ち報告すべければ松本に面會して驚と相談すべしと言ひ聞けたり、(中略) 松本龜吉、奈良柳生産藏より回送の踏石及び石燈籠を赤坂庭園に運送せし旨來報す。因て右外山英策の事を話し置けり。
58	4	264	1916(T5)	10	17	午後、妻と共に婦森庵に赴き、同庵に於て藤谷宗匠の瀟湘手前を一覽す。他所と違ひ茶碗と建水の取扱上研究を要すべき所あればなり、猶ほ庭地を一覽し松本龜吉に榎木の指附方を命ぜり。
59	4	398	1916(T5)	11	5	午前、農學士外山英策來宅に就き同様に赤坂新宅地に赴き榎木屋松本龜吉に紹介し、後來赤坂庭園建築中は外山氏出張し、園藝築園法を研究すべきに就き十分の便宜を與ふべき旨申渡せり。外山氏は爾後毎日由張見習ひの旨。
60	5	134	1917(T6)	4	1	妻と共に赤坂新宅普請場に赴き電気、水道、建具等を取定め、且つ松本龜吉に築園の概要を指圖せり。
61	5	154	1917(T6)	4	18	午後二時、赤坂新宅に赴き築園の指圖を爲し、松本龜吉に命じて大體の粗張りを定めぬ。
62	5	212	1917(T6)	6	1	午前八時半、松本龜吉を伴ひ白金の鶴山邸に赴き、主人不在なれば後庭空地を巡視して礎石置場を指定せり。奈良の柳生産藏より回送の當麻寺附近の某家礎石一式少當前に回送したれば、一部を赤坂新宅に他を鶴山邸石置場に回送すべき旨松本に命ぜり。
63	5	213	1917(T6)	6	2	午前、松本龜吉を伴ひ向島白鷺神社の附近某宅の椎の木を賣見せしが、赤坂新宅女房及び養生所廻りの目隠しとして其中四、五本を選り取り、此外庭園用として榎の木三本をも買取りぬ。小梅の婦森庵に立寄り庭園を見廻しに、氣候の加減にや椎の木に油蝋の漬き出でて進々蔓延の根れあるに依り、松本に命じて除防法を講じせぬ。
64	5	215	1917(T6)	6	4	松本龜吉、白鷺附近より椎一本、榎五本を赤坂新宅に回送し來りたるに就き立會ひて其移植の場所を指定す。
65	5	261	1917(T6)	7	6	午前、赤坂新宅に赴き、奈良の柳生産藏より回送の柳蔭石四個中一個を玄關前に埋附する事と爲し、松本龜吉に其位置を指示せり。
66	5	313	1917(T6)	8	23	松本龜吉を伴ひて白金今里町の藤山留太郎宅に赴き、先般來同邸空地に送り込み置きたる礎石、石燈籠を檢分し、夫れぞれ其評價を定め、高山長率、伊澤良立兩氏に先づ所要だけ選ばせしむる事と爲せり。
67	5	373	1917(T6)	10	18	昨日來訪せし北海道の排田謹也、石燈籠、踏石入用の由に就き、本日、松本龜吉を招き排田氏を案内して白金藤山邸内の奈良石を一覽せしむべく申附けぬ。
68	5	381	1917(T6)	10	26	午前、多田厚雄、松本龜吉を招き、崖崩れの場所を檢分して應急手當を命ぜり。
69	5	414	1917(T6)	11	20	去月初の大風に吹き折られたる玄關前の松の木にて代ふべき椎の木を見當りたれば、本日松本龜吉をして之を指附しむ。
70	6	322	1918(T7)	5	13	午前八時半、外山英策、松本龜吉等と下池谷津村順天堂主人宅に赴き其築園築造を檢分す。東南西快閣にして目黒方面を見渡し、西方に富士山を望む。外山英策築園築造を引受け初めて設計を爲すに就き、余は津村主人夫婦に面會し、外山が築園家として世に立たんとして今日まで一年有半を經過したる實地を語り、結園築造は主人自ら其好む所を實現するが肝腎なれば、其思ふ存分に注文すべしと注意し、茶室築造場所等に就き夫れぞれ意見を述べ置きたり。
71	7	41	1918(T8)	1	30	榎木屋松本龜吉を招き、先般前山久吉氏が築園を心得たる榎木屋を世話し異れよと依頼し來りたるに對して、不日前山邸を訪ひ實地を檢分して來るべしと命ぜり。
72	7	80	1918(T8)	3	4	午後三時、高橋江藤三郎の新宅地を檢分す。江藤は弘報堂として廣告取次を以て身代を作りたる者なるが、今度高橋英吾等南側に於て千坪餘の邸宅を構ひ、崖地を切り崩して此處に新築する都合と爲り、松本龜吉が其眞意請を引受けたるに依り、玄關入口庭園廻りの構造に就き余の一覽を乞ひたし、今朝江藤自身來宅にて懇懇に就き實地に就て檢分せしに、東南に品川海を見降らして眼界際る構、構造次第にて露る面白き邸宅と爲るべければ、各箇所につき余の意見を申附けて立歸れり。
73	7	324	1918(T8)	9	19	午前九時、奥村金之助、松本龜吉同往、目黒の津村留吉方に赴き庭前茶室及び廣間建築を檢分す。外山英作監督の下に久しく築園中なる同園も七分通り出来上りて庭前の崖地に大庭を造られしが、今度茶室廣間より此大庭を圍む態向を以て園藝講堂に付き、實地檢分の上其園案は余が研製して建築工事を奥村に擔當せしむる都合と爲り、主人夫婦立會の上、小間三疊、臺目廣間八疊、水庭附の一構を造るべし決定し、猶ほ既成園内に就き二、三方所木石の移動を指圖せり。(中略) 午後、多田厚雄、松本龜吉同往、妻と共に赤坂新宅普請場に赴き、若し彼の宅地に新築して現宅を其儘保存するを得れば經濟上非常に有利なるが故に實地に就き研究せしに、米川及び山王の森の眺望眼界稍狭くして到底現在の如くなるを得ざれば、彼の宅は一階住居の用に供し、最初の計畫通り現住居の事を進行すに決り、而して本日古倉家代埋入と石宅地賣買契約を爲し手附金として金一萬圓を渡せり。
74	7	374	1918(T8)	10	17	午前十時、大又主人奥村金之助を招き津村順天堂茶室園案を示して其製圖を依頼せり。同時、松本龜吉を招き今日藤山邸にて目標を附けたる石燈籠及び井筒を夫れぞれ福井、田中兩家に回送すべく申附けたり。猶ほ來月一日向島婦森庵に於て來會開演の準備に就き種々打合せを爲せり。
75	8	133	1920(T9)	4	22	本日より東南崖埋地と在來の庭と連接工事に着手し、兼範師松本龜吉出張、樹木植換へを指圖せり。
76	8	144	1920(T9)	4	29	朝來松本龜吉始め榎木職人入り込み東南崖埋地の築園に従事せり。
77	8	174	1920(T9)	5	26	松本龜吉を招き己に埋立瀆みの東南崖地に樹木を移し、從來居間の前に在りたる金燈籠の位置を變更すべく申附けたり。
78	8	188	1920(T9)	6	9	榎木屋松本龜吉を招き築園築造の指圖を爲せり。
79	8	294	1920(T9)	9	20	昨夜、濱町片屋六郎方の庭を造りし時、捨石一個不十分なる者ありたれば他日取り替へんと思ひ居りしに、場所狭ければ小き露地燈籠を以て捨石に代ふる事と爲し、今日松本龜吉に命じて右露地燈籠を片屋方に差送れり。
80	8	368	1920(T9)	11	8	午前、政一木庵庭地補修を爲し、松本龜吉に命じて手下五人に飛石捨石を掛置せしむ。
81	8	373	1920(T9)	11	17	松本龜吉を招き一木庵庭地築造に就き大體の指圖を爲せり。

■『萬象録・高橋常庵日記 1巻〜8巻』(高橋義雄著、思文閣出版発行)を元に作成。 漢字は旧字体を原則としたが、パソコン上表現できないものに関しては新字体を使用した。